

# 補聴器検査や調整で安心

国内の難聴者は1500万人以上いるとみられる。補聴器をつける場合は、購入前に耳鼻科を受診することが望ましい。難聴の程度や原因を調べ、補聴器が必要かどうかを判断するための。装用当初は不快に感じる人が多いだけに、機器を調整しながら慣らしていく作業が欠かせない。

読売新聞は今年2月、聞こえの改善に向けた「補聴器適合検査」実施を国に届け出た600医療機関に、2015年10～12月の診療実績などをアンケートし、273施設から回答を得た(回収率46%)。一覧表には、この検査を受けた患者が5人以上の施設(該当がない県は最多の施設)を多い順に、聴覚リハビリの実施や、耳鳴りの音響療法について掲載した。補聴器適合検査は、補聴器を装



165

用し、言葉の聞き分けなどがどの程度向上するかを詳しく調べる。人員や検査体制が整う施設が届け出て、実施できる。保険診療でも患者の経済的負担が大きく時間もかかるため、積極的に行わない施設も多い。

補聴器診療では、聴覚リハビリを担う言語聴覚士の役割も大きい。聴覚リハビリでは、音を聞いて理解するために脳の働きを鍛えるなどの方法がある。認知機能の低下予防も期待できる。

## 耳鳴り 音響療法で改善

難聴は耳鳴りの原因にもなる。聞こえづらい音を聞こうとして脳が興奮し、耳鳴りが起こると考えられる。治療の柱は、音響療法だ。雑音などを出す機器「サウンドシエネレーター」や補聴器を装用して、耳鳴りを気にならなくする。

日本では、難聴でも補聴器を使わない人が多い。公費の補助が乏しい上、見た目を気にする人もいる。日本補聴器工業会の調査では、補聴器装用者の満足度は39%で、欧州諸国の半分程度。十分な調整を受けずに装用するケースが少なからずあるとみられる。

聞こえづらさがあると、誤解から人間関係のトラブルを招き、周りの交流も減りかねない。生き生きと過ごすため、放置せず、補聴器に詳しい耳鼻科医を受診することが重要だ。(中島久美子)

くらし

健康・医療